

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：34305

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02402

研究課題名（和文）専門職としての教職の専門性の高度化とwell-beingの向上に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A Fundamental Study on the Sophisticated Professionalism of Teaching and the Enhancement of Well-Being

研究代表者

森 久佳（MORI, Hisayoshi）

京都女子大学・発達教育学部・教授

研究者番号：00413287

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、教職における長時間勤務・多忙化と生活時間の貧困化の改善を図りつつ、専門職としての教職の専門性の高度化とウェルビーイング（wellbeing：WB）の向上とを同時に果たしながら、チームとしての学校づくりを効果的に展開することに資する研究的知見を創出・提示することだった。その結果、WBをめぐる解釈の多様性を尊重した共通善（common good）の視点に基づく「ヒューマンズ的アプローチ」のディスコースと弁証法的観点が、教職の脱専門職化への対抗軸となり、教師（学校）のWBの向上の基盤となることが見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教員の多忙化やカリキュラム・オーバーロードといった諸課題に対して、本研究で検討した「ヒューマンズ的アプローチ」のディスコースと弁証法的観点を踏まえた教師ウェルビーイング（Teacher Well-Being）の視座は、教職に就く人々自身の生存権も考慮する視点が十分に考慮されていないともいえる今日の日本の状況に対して、教師教育（現職教育及び教員養成）根本的な問い直しを迫るものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to share research findings that support to the effective development of schools as a team and the enhancement of the professionalism and wellbeing (WB) of teachers. This can help improve the long working hours, busyness and poor living conditions experienced in the teaching profession. As a result, it is found that the discourses and dialectical perspective of the 'humanist approach', which is based on the idea of the "common good" that strongly values diverse interpretations of WB, can act as a counterbalance to the de-professionalization of the teaching profession. This can also serve as a foundation for enhancing the WB of teachers and schools.

研究分野：教育方法学（カリキュラム、教師教育）

キーワード：教師教育

1. 研究開始当初の背景

近年、国内外で教職の「非専門職化 (deprofessionalization)」を示す兆候が指摘されている。こうした教職の危機的な状況に対して、世界的な教師教育研究の動向では、「専門職としての教職の well-being = 心身の幸福と健康」に着目する研究アプローチが盛んとなっている。例えば、教授と学習が最大限の効果をあげるために、教師 (教員) は高い水準の well-being と自己効力感、自信を抱く必要があるため、教師のストレスと well-being が政策及び公共議論において主要な課題となっている (Schleicher 2018)。また、教師 (教員) の well-being の向上を目指しながら、教職の仕事と活動の特性を専門職の観点から位置づけ直す研究の展開もみられる (例えば、Day 2017.)。

一方、日本においては、専門性の高度化に関する研究や、教職の長時間勤務や多忙化、そしてそれと連動した教職のメンタルヘルスや働き方改革に関する研究が近年数多く着手されているにもかかわらず、それらの成果や知見が国際的な諸研究ですでに着手されている「専門職としての教職における well-being = 心身の幸福と健康」の観点から十分に整理・検討されていない現状がある。国際的な教師教育研究の視座を鑑みるならば、今日の日本の教師教育研究に対して求められる研究課題は、教職の長時間勤務と多忙化の改善を図り、生活時間の貧困化を食い止め、一方で専門職としての教職の専門性の高度化と well-being の向上を同時に実現しながら、チームとしての学校づくりを展開する営みに資する知見を創出することにあるといえる。こうした作業を通して、世界的に進行している「非専門職化」の流れに抗し、専門職としての教職の専門性の高度化に関する新たな研究ディスコース (言説・議論空間) を形成することが可能になると考えられる。

以上が、本研究開始当初の背景であった。

2. 研究の目的

本研究は、教職における長時間勤務・多忙化と生活時間の貧困化の改善を図りつつ、専門職としての教職の専門性の高度化とウェルビーイング (well-being、以下 WB) の向上とを同時に果たしながら、チームとしての学校づくりを効果的に展開することに資する研究的知見を創出・提示することを目的とした。具体的には次の3つであった。

教職と WB の向上及び教職の専門性・専門職性の高度化に関する国内外の研究動向を精査し、その理論的見地を整理・検討する

教職員及び保護者・地域が積極的に関わりながら、チームとしての学校教育実践を展開している具体的な学校教育現場を対象にしたフィールド調査 (参与観察、インタビュー調査等) を行い、その具体的内容を明らかにする、

及び それぞれ導出した知見を総合的に考察することで、長時間勤務・多忙化に端を発する日本の教職に関する危機的な重要課題の克服を図りつつ、専門職としての教職における専門性の高度化と WB の向上を同時に成し遂げる知見を創出し、その意義と課題を検討する。

3. 研究の方法

本研究は、関連文献の収集・分析と国外での訪問調査を中心に行った。訪問調査の詳細は下記の通りである。

OECD フォーラム (パリ) に参加し、WB をめぐる国際的な議論のテーマ等を調査した (2019年6月)

オランダの複数校の学校 (アムステルダム) を訪問し、校長等にインタビュー調査を時失した (2023年3月)

オランダの複数校の学校 (アムステルダム) 及び教育サービスセンター (CED、ロッテルダム) を訪問し、校長等にインタビュー調査を実施した (2024年3月)

以上の調査活動から得た知見を整理して分析・検討を行った。

4. 研究成果

(1) WB の多義性

非常に多義的である WB の概念は、主として「快楽主義的伝統 (hedonic)」と「幸福主義的伝統 (eudaimonic)」の流れに大別される。「快楽主義的伝統」は幸福 (happiness) や肯定的感情の存在と否定的感情の欠如、人生への満足などの構成要素に着目する立場であり、「幸福主義的伝統」は、肯定的な心理的機能と人間の発達に着目する立場である (Dodge, et.al., 2012)。その他にも、「客観的 (objective)」と「主観的 (subjective)」の二側面で WB を概念化することもある。客観的側面は、一般的に個人の外部にある経済的資源 (収入や物品)、政治的状况、健康やリテラシーといった事象を指し、主観的側面は、幸福感 (happiness)、情動 (emotion)、エンゲージメント、目的、人生の満足度、社会的関係、能力 (competence)、達成感 (achievement) といった個人の内的な事象を指している。

このような多義性を有する WB は、今日、均衡 / 恒常性の概念を汎用的な定義として援用されることが多い。この概念は、WB を「個人の資源 (リソース) の蓄えと直面する困難な課題や挑戦したい事柄 (challenges) との間の均衡点 (balance point) にある状態」と定義している (Dodge et.al., 2012)。

なお、OECD は 2011 年より、WB を国際的に計測するより「良い暮らしイニシアチブ (Better Life Initiative)」プロジェクト (以下、BLI) を展開し、人々が自分の生活をどのように考え、感じているかという「主観的幸福 (subjective well-being)」の概念を重視している。そして今日、教師の WB が教師の仕事の質や生徒の成果への影響と深く関係しているため、教師の WB を保障することは教育の将来にとって非常に重要であるとの認識が国際的に広まってきている。OECD も教師 (教員) の WB と質の高い教育実践の両立を打ち出し、学校内外にまたがる国家的規模から教室での実践といった大小の状況を構造的・体系的な観点から WB の検討に着手している。

(2) コロナ禍における学校・教師 WB の重要性

本研究を実施した主要な期間 (2020~2022 年度) は、COVID-19 による世界的パンデミック (コロナ禍) に見舞われた時期でもあった。そのため、予定していた訪問調査等を十分に実施することが困難だったため、関連文献等の分析・検討を中心に行った。

その結果、教員の多忙化やカリキュラム・オーバーロード (curriculum overload: カリキュラムの過負荷) といった諸課題を一層深刻にさせ、「教育」という営みそのものを再考させる事態を招いた COVID-19 によるパンデミックは、生存権と関連した WB やレジリエンス (resilience) の観点から「学校」という教育機関及び「教師」という存在そのものを問い直すことにつながるものであることを見出した。また、とりわけ、日本の一連の教育改革並びに教師教育改革動向においては、教職に就く人々自身の生存権も考慮する視点が十分に考慮されていない傾向が見受けられた。そのため、教師ウェル・ビーイング (Teacher Well-being: TWB) の観点を踏まえた改革の重要性を国内外の動向を踏まえて確認することができた。

(3) 教職の非専門職化への対抗軸としての WB のディスコース

ユネスコの『教育の再考』(Rethinking Education) は人間主義的 (ヒューマニズム的) アプローチを掲げた上で、功利主義的・人的資本論に基づく教育のディスコースの組み替えを企図しているが、その際、WB をめぐる解釈の違いを尊重して功利主義的教育観を見直し、関連性が豊かな教育を共通善として焦点化する必要性を指摘している。また『教育の再考』は、WB 自体を、個人や家族、地域社会の信念、価値観、経験、文化、機会、文脈などを尊重した多様かつ流動的なものと見なしている。そして、WB はポジティブな概念に支えられた人々全員が目指しているものでありながらも、そうした流動性において一人ひとりに固有のものであり、尊重される必要のある自分自身の感覚を提供してくれる概念だと位置づけられている (日本教師教育学会第 10 期国際研究交流部 2022)。

このディスコースに TWB の概念を位置づけることによって、人的資本論を基調として進展する教育改革とそれを通じた教師の脱専門職化への対抗軸となるディスコースを構築することが可能となる。教師の専門職化・脱専門職化をめぐる動向においては、例えば、専門職化する意図を掲げながら、結果的に教師をカリキュラムの実施・翻案という狭い世界に限定させるような脱専門職化 (de-professionalising) へと帰結させ、教師を管理統制する手段として位置づける上からの政策ディスコースの実態が指摘されている (Ro 2020)。それに対して、人間主義的アプローチの観点に組み込まれた TWB の捉え方は、こうした教職の脱専門職化に対するオルタナティブな視座となりうる。

こうした人間主義的アプローチに立った TWB の実現可能性は、オランダでの学校訪問調査でも確認することができた。特に、オルタナティブ教育を推進している複数の学校を訪問した際、それらの学校では、教師同士の同僚性のみならず、教師たちによるカリキュラムの自律的な改善の営みも併いながら、教職の専門性の向上を図る専門性の向上 (Professional Development) の機会も保障されていた。

(4) 今後の課題

コロナ禍を機に学校の業務等を大幅に見直すなどして認識と行動の転換を図ることによって、働き方改革を実施した学校が日本でも少なからず見られた。それは、自校のカリキュラムを教師たち自身で開発する「学校を基盤とするカリキュラム開発 (SBCD)」と教師 (学校) の WB の向上が両立する必要性と可能性への追求が展開したとも言える。そこで、今後の課題は、より学術的・研究的アプローチにより、カリキュラム・オーバーロードの克服と連動した教師 (学校) の WB 向上の実現に資する知見を見出すことであると考えられる。

【引用・参考文献】

- Day, C. (2017) *Teachers' worlds and work*. Routledge.
- Dodge, R., Daly, A., Huyton, J., & Sanders, L. (2012). "The challenge of defining wellbeing." *International Journal of Wellbeing*. 2(3).
- McCallum, F., D. Price, A. Graham, and A. Morrison. (2017) *Teacher wellbeing: A review*

- of the literature*. Association of Independent School of NSW.
- Ro, Jina (2020) "Curriculum, standards and professionalisation: The policy discourse on teacher professionalism in Singapore." *Teaching and Teacher Education* 91.
- OECD (2013) *OECD Guidelines on Measuring Subjective Well-being*. OECD Publishing. (邦訳: OECD (2015) 『主観的幸福を測る: OECD ガイドライン』 桑原進監訳、高橋しのぶ訳、明石書店).
- Schleicher, A. (2018). *Valuing our Teachers and Raising their Status: How Communities Can Help*. International Summit on the Teaching Profession. OECD Publishing.
- Spratt, J. (2017) *Wellbeing, Equity and Education: A Critical Analysis of Policy Discourses of Wellbeing in Schools*. Springer.
- 日本教師教育学会 第10期国際研究交流部・百合田真樹人・矢野博之編著 (2022) 『ユネスコ・教育を再考する: グローバル時代の参照軸』 学文社。
- 渡邊淳司・ドミニク・チェン監修・編 (2020) 『わたしたちのウェルビーイングをつくりあうために: その思想、実践、技術』 株式会社ビー・エヌ・エヌ・新社。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 玉城明子・森久佳	4. 巻 5
2. 論文標題 深い学びを支える指導観についての考察：東井義雄の指導観に着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 京都女子大学教職支援センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 67-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 森久佳・玉城明子	4. 巻 1
2. 論文標題 大阪の学習集団づくりにおける「居場所」論と人権教育の観点を踏まえたこれからの学校づくりの展望	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育学論集	6. 最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 坂井武司・森久佳・村井尚子・落合利佳・齊藤和貴・玉村公二彦	4. 巻 4
2. 論文標題 新しい時代の教育実習モデルの開発に関する研究：COVID-19の感染拡大下におけるオンライン教育実習の事例	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都女子大学 教職支援センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 27-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森久佳・坂井武司・村井尚子・落合利佳・齊藤和貴・玉村公二彦	4. 巻 4
2. 論文標題 実践報告：初等教員養成段階におけるオンライン教育実習に関する報告：実習アンケートの自由記述式回答の結果と先行事例との比較を踏まえて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都女子大学 教職支援センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 153-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森 久佳	4. 巻 61
2. 論文標題 教職の専門職化の観点からとらえたデューイ実験学校の特徴	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本デューイ学会紀要	6. 最初と最後の頁 101-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢野裕俊、田村知子、森久佳、廣瀬真琴、深見俊崇、小柳和喜雄、木原俊行	4. 巻 29
2. 論文標題 研究開発学校におけるカリキュラム開発の経験：教職の専門職資本形成に注目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 カリキュラム研究	6. 最初と最後の頁 29-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 森久佳
2. 発表標題 研究と実践の視野の変化
3. 学会等名 日本教師教育学会国際研究交流部シンポジウム (UNESCO "RETHINKING EDUCATION: TOWARDS A GLOBAL COMMON GOOD?" 翻訳刊行記念企画)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Naomi, KAGAWA, Hisayoshi, MORI, Toshitaka FUKAMI
2. 発表標題 Curriculum Reform and Teachers' Well-being
3. 学会等名 世界教育学会 (WERA 2021Virtual Focal Meeting) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森 久佳
2. 発表標題 デューイ実験学校における教師の専門性の向上を目指した取り組みの意義と課題
3. 学会等名 日本教育方法学会第56回大会（自由研究発表）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森 久佳
2. 発表標題 課題研究：「コース・オブ・スタディ（Course of Study）」の観点からみた わが国の「学習指導要領」の原理的性格をめぐる諸課題
3. 学会等名 日本カリキュラム学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KAGAWA Naomi, MORI Hisayoshi
2. 発表標題 Japan: Building capacity for school-based professional learning
3. 学会等名 2 nd Capacity Building Workshop on Teaching and Learning Development: Initial teacher preparation and professional development By Bureau of Academic Affairs and Educational Standards, OBEC（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森 久佳
2. 発表標題 シンポジウム：「デューイ実験学校における教師教育の展開と教職の専門性をとらえる視点」
3. 学会等名 日本デューイ学会第63回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 日本教師教育学会 第10期国際研究交流部、百合田 真樹人、矢野 博之、香川 奈緒美、金井 香里、森 久佳、荒巻 恵子、深見 俊崇	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学文社 (GAKUBUNSHA)	5. 総ページ数 192
3. 書名 ユネスコ・教育を再考する	

1. 著者名 伊藤実歩子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 234
3. 書名 変動する総合・探究学習	

1. 著者名 齋藤義雄編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大学図書出版	5. 総ページ数 208
3. 書名 教職概論：理想の教師像を求めて	

1. 著者名 五石敬路編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 256
3. 書名 子ども支援とSDGs：現場からの実証分析と提言	

1. 著者名 日本デューイ学会編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 340
3. 書名 民主主義と教育の再創造：デューイ研究の未来へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------